

# インフルエンザ感染症と 漢方治療

総合診療センター 漢方外来 山川 淳一

今日からインフルエンザの予防接種を行うようになり冬が近づいてきたことを感じます。インフルエンザの予防注射が普及してきており、重症例は減少してくるでしょう。

冬期は外界の寒冷刺激から身を守るために多くのエネルギーを消耗しやすく、体力が低下しがちなことと、冬の大気の乾燥によって上気道の粘膜の免疫力が落ちているため、鼻やのどから感染しやすく、また、いったんかかると長びきやすくなります。

漢方的には悪寒があって発熱する「寒証型」(傷寒型)と、発熱はあるが悪寒はほとんどなく、口が渇き、のどの痛みなどを特徴とする「熱証型」(温病型)に大別して治療します。インフルエンザ感染症は「寒証型」に分類され、からだを暖め、発汗を促すような漢方薬を用います。

インフルエンザにかかって発熱するのは、体が体温を上昇させてウイルスの増殖を防ぎ、治そうとするときの防衛反応のあらわれです。通常、熱が昇りきるまで寒けがあり、からだを温めると次第に一定の体温に達し、寒気はおさまります。さらに体を温めているとその熱は汗となって、それ以上体温は上がりません。じわじわと汗をかいている状態を数時間保っていると、次第に熱は下がり治っていきます。

つまり、「発汗療法」です。漢方薬としては麻黄湯が代表的です。麻黄

湯は、強力な発汗解表薬で、体力も十分あり、38.5度以上の高熱、強い筋肉痛や悪寒など、重いかぜに用いられ、若い人のインフルエンザ(傷寒型の重症感冒のかたちをとりやすい)などに適応します。

タミフルと麻黄湯の併用も相乗効果があります。麻黄湯の投与期間は発汗が起こるまでで発汗が起こればそこで中止とします。しかし、セキや痰をとる薬は含まれていないことと、胃が弱い人への配慮がなされていない(麻黄は虚弱者の胃にこたえます)ことも覚えておきたいものです。

インフルエンザがこじれて治りにくい場合も漢方は有効な処方がいろいろあります。カラ咳が続く場合には、のどの乾燥を滋潤し、せきを止める麦門冬湯(ばくもんどうとう)など、痰の多い咳で不眠が続く人には竹茹温胆湯(ちくじょうんたんとう)が用いられ、咳がおさまりよく眠れるようになります。ふだんのどが弱く、のどがイガイガしてカラ咳をする場合には柴朴湯(さいぼくとう)などを用います。